

## 武家屋敷群の活用と

### これからの観光



奈良迫 英光

一、伝統的建造物群保存地域と日本遺産文化財保護法では、「伝統的建造物群保存地区」とは、城下町・宿場町・門前町・寺内町・港町・農村・漁村などの伝統的建造物群が残り、これと一体となして歴史的風致を形成している環境を保存するために、市町村が定める地区を指している。

この制度は、文化財としての建造物を「点（単体）」ではなく「面（群）」で保存しようとするもので、保存地区内では社寺・民家・蔵などの「建築物」はむろん、門・土塀・石垣・

水路・墓・石塔・石仏・燈籠などの「工作物」、庭園・生垣・樹木・水路などの「環境物件」を特定し保存措置を図ることとされている。我が国にとってその価値が特に高いものを「重要伝統的建造物群保存地区」として選定しており、令和3年8月現在、日本全国で104市町村126地区あり、約3万件的伝統的建造物及び環境物件が特定され保護されている。

県内では、「知覧」、「出水麓」、「入来麓」「加世田麓」の4地域が保存地区に選定されており、いずれの地域も武家屋敷群を中心とした武家町の名残を留めている。

薩摩藩は、領内を113の区画に割り、それぞれに地頭・仮屋を設け、その周囲に「麓」という武士の集落を作り、その地域の行政と軍備を管轄させた。この制度は島津家当主の内城に対して外城といい、歴史用語として外

城制と呼ばれている。

また、鹿児島県では1県9市を構成自治体とする「薩摩の武士が生きた町々武家屋敷群「麓」を歩く」が令和元年5月、文化庁の「日本遺産」に認定された。

## 二、武家屋敷サミットの開催

平成23年出水市の渋谷市長（当時）の呼びかけで、南九州市、出水市、薩摩川内市の3市が連携して「伝統的建造物群保存地区」をもっと観光資源として活用し、広域観光推進という趣旨で「武家屋敷 SUMMIT 2011」が知覧武家屋敷で開催された。

小生がコーディネーターとなり「新しい時代の武家屋敷観光」をテーマに、市長とそれぞれの武家屋敷保存会の会長の6人が、今後の展開について意見を交換した。

武家屋敷の魅力を一緒に情報発信し、旅行者がそれぞれの地域を周遊できる環境整備に

努め、リピーターを創造すべく、スタンプカードの発行やガイドの充実を図ることなどの取組を確認した。歴史的資源を活かし相互に連携・協調して今後活動する証として協定書も交換した。

新幹線停車駅を基点にバス、レンタカー、マイカーを活用した薩摩半島観光ルートの開発、武家屋敷群を保存・管理している団体の相互交流の推進、3市が協力しての県外客誘客活動の展開となっている。

武家屋敷のストーリーを繋ぎ、地域の四季折々の情報を提供し、相互に経済効果をもたらす取組が重要である。

コロナ禍を経験し、消費者意識が変化し、WEB予約、個人化が進んでいる。一方、ICTの進展は情報入手・発信の多様化、誘客の広域化を可能にしていることから、3市の新たなプラットフォーム戦略が求められる。

### 三、各武家屋敷群の魅力と活用

#### (1) 知覧武家屋敷群

第18代知覧領主島津久峯の時代に造られた麓地区は、領主のお仮屋を中心に地割がなされ、その後方には母ガ岳の優雅な山容がひかえ、麓地区全体が一つの箱庭のような雰囲気醸し出している。京の庭師が造った庭園は、母ガ岳を借景にイヌマキやサツキ、つつじが植栽され、築山泉水式1つ、枯山水式6つあり、約270年前（江戸時代）の感性を伝えている。

武家屋敷を繋ぐ道路の生け垣は、敵の侵入を防ぐために特有の作りとなっており、薩摩の小京都にふさわしい佇まいは、訪れる人の心を癒してやまない。

かつて知覧は戦時中に特攻隊の基地がおかれ、多くの若者が飛び立ち帰らぬ人となった悲劇の物語の地でもある。近くの「知覧特



知覧武家屋敷



知覧武家屋敷庭園

「攻平和会館」はバブル期までは多くの観光客が訪れていたが、戦争を知らない世代が増え、また旅行ニーズの変化により入館者数は伸び悩んでいる。指宿への観光ルートの一つであるが、その指宿も宿泊者の減少という課題に直面している。

知覧は鹿児島でも有数の茶どころであり、茶摘み体験や茅葺屋根の部屋で庭園を眺めながらのお茶時間も提供したい。新しい需要開拓が望まれる。

## (2) 出水武家屋敷群

薩摩藩の鹿児島城下から領外へでる主要な街道の一つで、海沿いに肥後に通ずる重要な軍事的拠点で、国境には厳しい「野間の関所」が置かれた。出水麓は薩摩藩の中でも最も規模が大きく、また、集められた武士はつわものが多く、絶えず鍛錬を積んだと言われ、その精神は「出水兵児修養掟」に引き継がれ

ている。公開されている「税所邸」「竹添邸」で武家屋敷の魅力に触れることができる。NHK大河ドラマ「篤姫」のロケ地に選ばれ、休日には「いずみ観光牛車」が運行され観光客の人気となっている。

また、着物で武家屋敷を散策後、琴の演奏お茶の接待を受け、着衣した新品同様の着物は安価で持ち帰ることができる。特に外国人には日本文化を体験できることが人気を博している。最近「宮路邸」が富裕層向けの宿泊施設として改装オープンした。武家屋敷群の用途変更として注目されている。景観を守りながら、経済効果を創出するいい事例になることを期待したい。

出本市には世界一の羽数を誇る「ツル渡来地」があり、周辺の干拓地は「ラムサール条約」に登録された。駅を中心に武家屋敷群との回遊性を確保できるかが課題である。



出水武家屋敷



出水着物体験とお茶会

### (3) 入来武家屋敷群

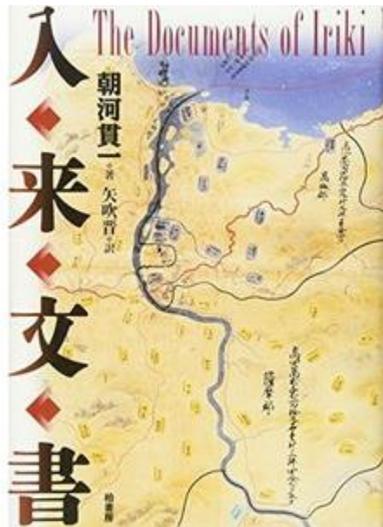
鎌倉時代、相模国の渋谷氏が入来に入部、入来院姓を名乗った。清色城を居城とし、明治維新までこの地を統治した。1595年から1613年迄島津氏の直轄地となり、この間に山城の麓に石垣、土塁を巡らした地頭館が築かれ、今の麓集落が形成された。山中には「曲輪」や「堀切」が、また、整然とした区割や茅葺門、お仮屋跡など多数の史跡がある。

美しい玉石群は、樋脇川の自然石を組んであり、生垣の緑が引き立させている。近くにある「旧増田家住宅」も見逃せない。

入来を有名にしたものとして「入来文書」がある。エール大学の朝河貫一教授によって著作されたものである。鎌倉時代、地頭として北薩地方に入部した渋谷一族のひとつ、入来院氏に関する文書の世界で、封建制度を知



入来茅葺門



The Documents of Iriki — 入来文書  
朝河 貫一・著／矢吹 晋・訳、柏書房（2005年8月発売）

る上での貴重な資料である。中世を研究する人が一度は訪れたいと思う地でもある。

入来武家屋敷群周辺には、市比野温泉、入来、諏訪温泉など特徴のある泉質を持つ鄙びた温泉がある。大宮神社は「君が代」発祥の地とされ、藺牟田池はラムサール条約の登録湿地となっている。

最近では、その武家屋敷群の中には空き家も目立っている。訪れた人が休憩でき、食事や地元産品、小物等が購入できる施設が求められる。リピーターの創出には四季折々の魅力発信が不可欠であり、そのことが経済効果をもたらす。今、地域住民の賛同を得ながら、「入来薪能」復活の取組が模索されている。

#### 四、これからの武家屋敷群の活かし方

誘客にはそれぞれの武家屋敷群の特徴・違い・魅力をいかに伝えるかが重要である。現地でのボランティアガイドの案内が欠かせな

い。人の語りがあつて始めてその造りに納得する。従来、伝統的重要建造物群などの文化財は、保存することに重点を置いてきた。今後は保存しながら活用することで誘客につなげ、経済効果を地域全体に広げることが重要である。

人口減少が続く中で関係人口拡大は不可欠である。日本の良き伝統の証であり、先人達が築いてきた文化財を、多くの人々に見学してもらう機会を提供することは街の魅力発信となる。

「鏡餅、ひな人形やこいのぼり、着物、風鈴、七夕、竹灯り」などを飾り、「琴の演奏、薪能、茶会、生花や習字の展示会」の発表の場所等として、四季折々の仕掛けが欠かせない。武家屋敷群を基点に周辺の魅力も発信することが持続できる地域への「道しるべ」となる。

日南市にある飢肥は、伊東氏5万1千石の名残をとどめる城下町であるが、10数年前までは 衰退が続く町であった。そこで飢肥城下町保存会が立ち上がり、「食べ歩き・まち歩き」のチケット付きマップを発売し、地域一体となって町の再生に努めている。日南線に「海幸・山幸」号が走り、武家屋敷群を活用することで新たな魅力ある街づくりに努めている。

県内には3か所以外にも、蒲生、加世田、垂水、串木野、甕島の里と手打、志布志、喜入等にも武家屋敷が残り、日本遺産に認定された。

今後は武家屋敷群・日本遺産のストーリーを繋ぎ、連携した取組が求められる。地域住民が文化の再興を通して、自分の街にシビックプライドを持つきっかけになることを期待したい。

## 五、これからの観光地づくり

### ・「SDGs」への取組 (1) 観光は地域社会産業

観光は社会的に有用ものが活かされることから「地域社会産業」として捉えている。大きな投資は必要なく現在ある地域資源の点検、磨き上げが重要である。

観光の流れは宴会型団体旅行から、多様なニーズを持ったツーリズムに変化している。

温泉、名所旧跡、娯楽だけでは持続できる観光地づくりは難しい。

消費者は、そこにしかない「自然・歴史・伝統文化のストーリー」「人々の暮らし」など地域の生活・文化にふれる交流の場を求めている。

周辺の第一次産業・2次産業を取り込み、その魅力を観光客に体感させることが欠かせない。

## (2) 地域をコーディネートできる人材の登用と情報発信

地域活性化には、地域をコーディネートできる人材の登用が欠かせない。「観光施設」「交遊事業」「宿泊施設」「直売・物産店」「飲食業」「農林水産業」「NPO」などあらゆる情報が蓄積された組織で司令塔の役割が求められる。四季の変化、農水産物、祭り、イベント、映画の舞台等のコンテンツを、観光客が共感を覚える動画等に組み替えることも求められる。地域の多種多様な人と交わり、自らも汗をかき動き、SNSやコンピュータに熟知している人材を配置して敏速に対応することが重要である。

行先選択や滞在先での行程を決めるにあたり、スマホやインターネットの情報検索サイトが主流となっている。常に旬の情報を提供し、問合わせにはシームレスで、ワンスト

ップで回答しなければならぬ。データとIT技術を駆使したDXの推進で、地域資源の新たな価値創造をはかりたい。

## (3) 公共空間の魅力づくり

経済効果を循環させるには、日常の空間を楽しむ仕掛けづくりが求められる。沿道からの看板・ゴミ箱の撤去、自動販売機の木枠化などで環境を守りたい。「農漁村のくらし」「四季の自然の移ろい」「地域に残る様々なストーリー」「五穀豊穰を願う催事」等魅力を発信したい。

女性が楽しめる「果物狩り」「収穫体験」「陶芸教室」「田舎料理作り」等本物の体験メニューも欠かせない。体験後は木漏れ日の下で食事であればより交流が深まる。美術館、博物館、文学館等の施設がある所は、定期的な展示会を、音楽祭等は前広にPRすることで滞在する人が多くなる。

#### (4) 「食」の魅力

観光にとって欠かせないのが「食」である。誘客には旬の情報が必要である。古民家や地元の人が行く居酒屋、農家での手作りの田舎料理、獲れた魚介類を使った漁師さんの店の食事等に人気がある。「食」こそ地域の生活文化を表すものである。

顧客のニーズは「安全・安心」「生産者の顔が見える食材で収穫までのストーリーが映る」ことである。近くに道の駅、直売店があれば楽しみも増加する。

#### (5) 地域・組織の連携

自治体のパンフレットは我町に関するところしか掲載してないのが多い。「観光客に県境はない」。「観光客は広域に移動する」ことから周辺の市町村の観光資源、生活・文化を一緒にPRすることで自分の町にないものがカバーされ、波及効果が生まれる。

また、自治体、観光団体、特産品協会、商工会などと連携することで相乗効果を高めることとなる。特に大都市圏でのPRはそれが功を奏する。

地域を回遊させることで経済効果が循環し、住民のシビックプライドを高め「おもてなしの心」の醸成にもつながる。垣根を超えた連携が求められる。

#### (6) インバウンド・富裕層への対応

コロナ禍でインバウンドは蒸発したが、収束後は大きなブームが来ると想定される。

鹿児島県は東アジアに近く、4か国からの定期便が再開されると一気に回復すると思われる。外国人の滞在には、外国語表記の充実、キャッシュレス店舗の拡大、バリアフリー、宿泊施設以外の食事場所提供等ストレスフリーの取組が欠かせない。

日本人の国内旅行需要が成熟している中

で、外国人受入こそが地域を救う方策の一つでもある。また、富裕層は消費額が大きく経済効果をもたらす。人口の上位0・3%にすぎない富裕層が全旅行消費額の4分の1を占めている。質の高いメニューを提供したい

## 六、最後に

観光は従来、宿泊や観光施設、運輸機関、飲食店・お土産店等がビジネスを展開してきた。これからは、住民、農林水産業、製造業、文化施設など直接観光に関与してこなかった人たちも取り込み、地域の魅力を創出し発信することが不可欠である。「量」から「質」への転換を図り、観光従事者のステイタスを上げる努力も欠かせない。

「社会」「経済」「環境」を守ることが「持続可能な観光地（SDGs）」となる。住民が地域に誇りを持つことで来訪者に対しブランド価値を糧に温かいおもてなしが提供できる。

シビックプライドを醸成したいものである。

不来方（こずかた）の お城の草に

寝転びて 空に吸はれし 十五の心

ゝ 石川啄木 ゝ

（元鹿兒島県観光プロデューサー）

## 【参考資料】

- ・ かごしまよかとこ100選
- ・ 薩摩川内市パンフ
- ・ フリー百科事典ウィキペディア

